

十日町市

原水協 だより

令和5年10月10日

発行 原水爆禁止十日町市協議会
 会長 久保田 愛 策

事務局 十日町市教育委員会
 教育文化部 生涯学習課
 十日町市本町1丁目上508番地2
 電話 (025)757-5011
 FAX (025)757-5010

Eメール t-edu-gakushu@city.
 tokamachi.lg.jp

原水爆禁止十日町市協議会では、今年も原爆犠牲者への慰霊と恒久平和を願い、広島市（八月五日、七日）派遣団を送りました。

広島市には南、川西、松代中学校の生徒十五名を含む二十二名で参加し、皆様からいただいた募金の中から、広島市に義援金二十万円、広島原爆病院及び原爆看護ホーム「舟入むつみ園」にお見舞金各五万円と花束をお届けしました。

長崎市は、台風六号の影響で式典参加は関係者のみに変更され、それに伴い当協議会加盟団体と事務局計三名の派遣を中止しました。長崎市へは、義援金十五万円をお送りし、使途につきましては原爆被害者援護の一助となるよう、お願いしました。

そして、市民の皆様から心を込めて折っていただいた折り鶴は、平和展示で十日町情報館に展示した後、広島市平和公園に捧げました。また、長崎市には折り鶴をお送りし、長崎原爆資料館に捧げていただきました。以下に、それぞれの派遣団員の感想文を紹介いたします。

広島市派遣団感想

被爆の実相を知る

広島市派遣団長 星名 大輔

十日町市議会を代表して広島派遣に参加しました。初日に広島市へ義援金を届けた際、市内には被爆電車が運行していることを聞きました。原爆ドームや平和記念公園を視察し、中学生の団員が持参

した折り鶴を「原爆の子の像」に捧げました。

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典では、熱線に焼かれ水を欲しながら亡くなられた犠牲者を慰霊するため水を提供する「献水」が行われました。広島市長は平和宣言の中で、世界中の指導者は、核抑止論は破綻していることを直視すべきだと訴えました。平和記念資料館には、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料が展示されていました。目を背けたくなるような資料もありましたが、中学生の団員は真剣な眼差しで被爆の実相を学習していました。

原爆看護ホーム舟入むつみ園には、偏見や差別を受けぬよう被爆の事実を隠して生きてこられた方が入所されることが多いそうです。派遣団を温かく迎えてくださいました。原爆投下から七十八年が経過し胎内被爆者も高齢化しており、原爆の語り部が年々減少していることが心配です。

赤十字・原爆病院では、当時多くの殉職者を出しながらも懸命な救護活動が行われたこと、白血病やがんなど長期に及ぶ放射線の影響を伺いました。病院の近くには爆風の威力を物語る、歪んだ鉄製の窓枠や、窓ガラスの破片が突き刺さった跡がモニュメントとして設置されていました。

今回の広島派遣を通じて、核兵器が使用されると、街が廃墟となり罪のない市民の命が無差別に奪われるだけでなく、生き残った人々も長年にわたって後障害で苦しむという非人道的な結末を迎えるなど、被爆の実相に理解を深めることができました。また、悲惨な体験をしたにもかかわらず、加害者への憎しみを乗り越えて人類の未来をも見据えた被爆者の願い、すなわち「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有することができました。



「原爆の子像」の前にて

広島を訪れて

天理教十日町支部 久保田 旭彦

今までは、テレビで式典の様子をただ眺めているだけでした。戦争や原爆のこ

とも漠然と反対していました。そんな折、原水爆禁止十日町市協議会の広島派遣団のお話を頂き、参加させていただきました。原爆ドームを生で見ることができ、島に来たのだと実感し、平和公園の「原爆の子」の周りには、全国から供えられた千羽鶴が飾られ、平和への願いがそこにはありました。

八月六日、八時十五分。原爆が落とされた時間に黙祷を捧げ、鐘が鳴り響く中、史料の写真の情景が頭に浮かびました。式典での子供たちの想い、広島市長の平和宣言の言葉を聞き身が引き締まった気持ちのまま資料館へ足を運びました。そこには当時の生々しい様子の写真や、家族に宛てた手紙、被爆した様々な建物、亡くなった人たちの着ていた服など痛々しいまま展示してありました。その中で印象に残っているものは当時十三歳の少年の遺体の下にあったお弁当箱、中身は当時、母が詰めて持たせたであろうご飯が黒焦げのまま残っていました。それを見たとき、原爆は今までの日常、明日来るはずだった生活、何気ない幸せ。それを一瞬で破壊し、絶望に変える怖いものと改めて実感しました。資料館を出るまでは胸の奥がずっしりと重くなるようなことが続き、漠然と反対だったことが、確実に反対という気持ちになりました。戦後から七十八年が経ち、当時を知る人は年々減り、今では平均年齢八十五歳になっているといえます、若くて七十七

歳。当時は母親のおなかの中だったらしく詳しく話せないそうです。そうなる、当時の話を聞くことができるのがラストチャンスでした。そのような機会に派遣団に参加できたことはいい経験で、同時にこれから後世に伝えるにはどうしたらいいのかということが、これからは生きる私たちの課題だと思います。この三日間の内容はとても濃く、これからの世界について考えさせられるものばかりでした。今回は貴重な経験の機会を下さりありがとうございます。

戦争と平和

平和を考える女性の会 小杉セツ子

戦争は、被害者であると同時に加害者でもある。出征前の米兵の言葉、「子供が生まれたんだよ。妻に会いたいよ。」日常の家族の暮らしが、赤紙一枚で離ればなれになってしまう。人間としての衣食住ができなくなってしまう。七十八年経っても被爆者の苦しみは、解放されることはない。「こんな思いは、他の誰にもさせてはならない。」という思いを、広島市長の強いメッセージから受け止めてきました。五月のG7広島サミットで、各国の首脳が、資料館の視察や被爆者との対話を経て核軍縮に関する文書がまとめられたが、各国は核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立てる



世界遺産「原爆ドーム」前にて視察の様子

べきであるとの前提で安全保障政策をとる考えが示されたとのこと。しかし一刻も早く核兵器廃絶に向け核兵器禁止条約の締約国となり核抑止論から廃絶へ向けて世界の人々と共に力を尽くすとの強いメッセージを発信していました。子供サミットでは、日本人の高校生が英語でスピーチし、核兵器の無い世界の実現に向けて日々活動している様子や、デジタル世代の大学生が出征した数百万人とも言われる兵士の足取りを追って地図上に表しインターネットで配信する姿を見て、希望が見えてきた気がしました。貴重な体験の機会をいただき、関係者の皆様には厚くお礼を申し上げます。

七十八年前の悲劇

南中学校三年 加藤 旺 汰

七十八年前、広島はたった一つの爆弾によって火の海となりました。派遣団として式典に参加し、私は、実際に、目と耳、そして心で原爆や被爆者の方々の実態について知ることができました。

平和記念資料館では、実際の物や、当時の映像、日記など、目を瞑りたくなるようなものが、多く展示してありました。焼かれた赤い背中、力なく寝込む被爆者。どれも想像を絶するものでした。それでも生きることが諦めず、明日を見据える、そんな姿に私はとても感激しました。平和な毎日がどれだけ幸せで尊いものか理解できました。

その後、広島原爆養護ホーム、原爆病院に行き、お話を聞きました。ここに出てきた話は被爆者の方々が御高齢となり、被爆の実相が語り継がないということ。原爆投下は必ず忘れてはいけない人類の大きな過ちです。一瞬にして奪われた命、そして日常はもう絶対に戻っては来ません。この経験を生かし、次世代に伝えていくことが、私たちの使命だと思っています。明日の世界がより明るくなるように、行動していきたいと思います。

過ちを繰り返さないために

南中学校三年 小堺美旺

八月六日、私たちは平和祈念式典に参加しました。そこで聞いた広島市の小学生による平和への誓いが一番印象に残っています。小学生と思えない力強い声、一生懸命訴える姿と言葉に、思わず涙が出ました。

広島平和記念資料館は、まるで自分が被爆した当時にいるようでした。当時の写真や絵、被爆した子供の服。被爆した人の「魂の叫び」。どれも目をそむけたくなるような展示物で、早く資料館から出たいと思っただけで済ませたい。当時被爆した人も、早くこの生活



原爆養護ホーム 舟入むつみ園にて

から抜け出したいと思っただけに違いありません。広島から十日町に戻ってきて資料館の展示を思い出そうとする胸が痛くなり、涙が出そうになりま

す。原爆は町や人の体だけでなく、心にも影響をもたらしたのです。私たちはとても貴重な体験をさせていただきました。現在、被爆者から実際に話を聞く機会が少なくなってきた

広島派遣を通して

南中学校三年 小林杏愛

私は広島派遣を通して、平和の尊さや戦争の恐ろしさについて改めて考えることができました。

特に印象深かったことは、平和記念資料館です。資料館には、原爆の被害にあった人々の写真や、原爆の影響で焦げた自転車など、戦争の恐ろしさを実感させる物が多くあり、たった一発の原子爆弾で大勢の人の命が奪われ、どれだけ戦争が恐ろしいものなのかが目に見えて分かりました。「助けて。」

と訴えかけられているような気持ちになり、張り裂けそうな思いがしました。

ほとんどの建物は原爆によって姿を消しましたが、唯一残ったものが原爆ドームでした。当時は原爆が落ちた日を思い出してしまおうと、原爆ドームを撤去してほしいという市民の声もあつたそうです。恐ろしい記憶を思い出してしまおう方もある中で、私たちに戦争の悲惨さを伝えるために、建物を残してくださいと感謝したいと思

います。当たり前のように平和な毎日を過ごしている今だからこそ、広島派遣で学んだことや感じたことを、友達や周りの人にしっかりと伝え、改めて考えていきたいと思

原爆の恐ろしさ

南中学校三年 徳永聖晴

十日町市代表として広島に派遣された徳永聖晴です。広島に行つて学んだことは原爆の恐ろしさです。今から七十八年前の一九四五年(昭和二十年)八月六日午前八時十五分に人類史上初めて原子爆弾が広島に投下されました。その三日後に長崎に原子爆弾が投下され、合わせて約二十一万四千人が亡くなつてしまいました。原子爆弾は人の命や住む場所、なにかも壊してしま

う恐ろしい兵器です。自分は原爆ドームを見に行きとても悲しい気持ちになりました。テレビや写真で見るとより実

物を見たら体中から鳥肌や震えが起きました。たった一つの爆弾で建物が一瞬にして崩れた皆さんの人が血を流す。想像しただけで冷や汗が止まりません。しかし七十年は草木が生えないと言われたこの土地には、自然がたくさん見られるようになりとても感動しました。

これから先、もう二度とこんなことが起きないようにみんなで力を合わせて協力し、平和を願っていきましょう。

自分で感じとれたこと

南中学校三年 樋口琉正

七十八年前、実際に原爆が落とされた広島で自分の目を通して学べるのがたくさんありました。

八月六日、平和記念公園での式典では市長をはじめとした様々な方の挨拶、献花やハトを放つなど自分の目で見て平和の大切さを感じとれました。

式典後には資料館にも行きました。そこにあつたのは当時の服やありえない壊れ方をした日用品などです。物だけでなく絵も飾ってありました。その絵に映るのは火傷で重症の子供たちや地獄と化した街の風景ばかりでした。核一つで平穩

な日常が一瞬にして無くなることを肌で感じました。また、近くにある原爆ドームには歩いて実際に見に行きましたが、あれほどの大きな建物が半壊するほどの威力だと知り心の底から恐怖まで感じました。

その後も原爆養護ホーム舟入むつみ園さんと広島赤十字原爆病院さんにも訪問させていただきました。そこでいろいろなお話を聞かせていただきました。

今日、この三日間の広島派遣を通して普段の生活では学べないことを現地へ行くという貴重な機会のもとたくさん学べました。二度と戦争が起きないように次の世代に原爆を語り継いでいきたいです。

戦争を二度としないために

南中学校三年 村山 葵音

私は八月五日から約三日間広島を派遣し、原爆の本当の恐ろしさを知りました。

初日に原爆ドームを初めてこの目でしっかり見させていただきました。教科書で見たものより迫力があり壊れかけた原爆ドームから原爆の威力、怖さを知ることができました。曲がった鉄、壊れた壁を見るととてもありえない熱風の強さが想像できます。

そして二日目には平和資料館にも訪問させていただきました。そこには中

学生の破れた服、腕のない人の写真、痛みを苦しむ人々の写真などがありました。いびりな写真や展示物を見て自分が普通に生活ができているありがたさを知ることができました。

最後にこの広島派遣を通して私たちの暮らしは本当に幸せであること、そして戦争は二度としてはいけない、ということが分かりました。年々この戦争の経験を伝える人が減ってきています。なので戦争の恐ろしさをたくさんの方が知り伝えていく必要があるのです。もうこのような悲しいことは起きてはいけません。なのでみなさんで行動していきませんか。

そして今回は貴重な体験をさせていただき本当に感謝しています。ありがとうございました。

広島を訪れる意味

南中学校教諭 相田 杏介

八月五日から七日まで広島市派遣団の一員として、広島市を訪問しました。義援金のお届けに始まり、平和記念式典への参列や、広島赤十字・原爆病院や広島原爆養護ホーム舟入むつみ園への訪問など多くの経験をさせていただきました。

私自身、社会科の教員として、広島や長崎への原爆投下は扱ってきました。

生徒に伝えるために教材研究をそれなりにしていたつもりでした。ですが、実際に訪れてみると、文字だけでは伝わることのない思いがこみ上げてきました。

昭和二十年八月六日の悲惨な出来事。そこからの見事な復興を遂げた広島。一方で後遺症や謂れない差別に今なお苦しむ方々がいるという現状。それでも希望をもって強く生きている方々。教科書の情報だけでは知ることができない多くを知ることができました。

これから生きる私たちは何をしなければならないのか。どんな行動がとれるのか。それを考えるヒントをもら



舟入むつみ園へ花束・お見舞いお届け

えたような気がします。それが今回、広島を訪れた意味なのだと思います。・社会科の教員として、そして今を生きる人として、伝えていかなければなりません。

広島派遣を通して学んだこと、感じたこと

川西中学校三年 小野塚 颯介

僕が広島派遣を通して学んだこと、感じたことは色々ありましたが、特に印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、平和祈念式典です。平和祈念式典では、広島市長の平和宣言や子ども代表の平和への誓いなど平和について深く考えさせられる機会になりました。また、参列した各国や核保有国が核の恐ろしさについて再び考え、この世界から核がなくなることに繋がっていかばいいなと思えました。

二つ目は、広島平和記念資料館です。広島平和記念資料館では、原爆被害がどれほどのものだったのか写真や衣服や水筒などから伝わってきました。特に被爆者の方々の写真を見て、苦しもうで痛そうで、もう戦争をしてはいけないと強く感じました。

もう戦争を繰り返さないために、僕は、平和記念資料館で見たことを周りの人達に伝えていきたいと思えます。



広島赤十字・原爆病院へお見舞金お届け

広島派遣を通して、

僕たちができること

川西中学校三年 小林 優来

一九四五年、八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が落とされ、広島が地獄となり、わずか数秒で十万人もの人々の命がなくなってしまう。僕たち日本国民はこのことを忘れてはいけないし、後世に伝えていかなければならない。

原爆投下から七十八年が経ち、初めて平和記念式典に参列した。岸田内閣総理大臣や広島県知事などの力のこもったあいさつには、もう二度とこのようになことは起きてほしくない、そして

起こしてはいけないという強い気持ちが伝わってきた。平和宣言や平和への誓いなどを聞き、戦争はあってはならないものという気持ちが大きくなった。僕たち中学生には戦争をなくすほどの大きな影響力はないと思う。しかし広島に原爆が落とされたことや核兵器の恐怖、平和の大切さを学校の人や地域の人達に伝え、後世につなげていくことは僕たちにもできることだ。戦争を二度と起こさないために「今」自分ができることをしていきたい。

広島派遣で学んだこと

川西中学校三年 高橋心愛実

私は、八月五日から八月七日まで、広島市派遣団として原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れました。

原爆ドームは壁が崩れ鉄骨がむき出しになっており、写真で見るとより衝撃的でした。当時ここにいた人達のことを想像すると心が苦しくなりました。資料館には、原爆投下後の広島の写真や衣服などが展示されていました。高層ビルが建ち並ぶ現在の広島からは想像できない程、悲惨な焼け野原が広がっていました。原爆は、一瞬で大切な人の命も食物も家も奪う恐ろしいものだと感じました。戦争は二度と

てはいけないと強く感じました。

訪問先では質問の機会があり、「これからの未来が平和であり続けるために私たちにできることは何か」、お聞きしました。「戦争でどんなことがあったのかを知り、周りに伝えていくこと」だと教えていただきました。広島から自宅に帰ると、いつも暮らしている家があり、私の帰りを待っていてくれた家族がいて、テーブルには夕食があり、すごく幸せだと感じました。今回で学んだ事を忘れず、幸せな生活ができていくことに感謝して過ごしていきたいです。

広島で感じたこと

川西中学校三年 丸山 瑛太

私は、広島派遣を通じて、戦争や原子爆弾の恐ろしさを改めて感じました。

私は原爆ドームや平和記念資料館を訪れました。そこにあったのは想像をはるかに超える悲惨な残骸や遺品の数々でした。焼け焦げた三輪車や衣類、当時の写真など様々なものが展示されていました。被爆後の放射線による被害の写真もいくつもありました。頭髮が抜けてしまった姉弟、死の斑点が出た人、ケロイドの人の写真がありました。それらを見て心が苦しくなりました。

このようなことは二度と起きてはいけません。しかし、広島市長の平和宣言で

もあつたように核による威嚇をする為政者がいます。そのような人々こそ広島や長崎を訪れ、核兵器や戦争の恐ろしさを知るべきです。

今、被爆した人は平均八十五歳を超え、伝える機会が減ってきました。私たちに出来ることはこの派遣を通して知ったことを、友達や家族に伝えたり、平和について考えたりすることです。この派遣で学んだことを今後の生活に生かしていきたいです。

平和の尊さ

川西中学校三年 渡貫芽依

今から七十八年前八月六日午前八時十五分、一つの爆弾により広島のは一瞬にして死の海となりました。私たち広島派遣団は当時何が起こったのか学ぶため広島に訪れました。

訪問二日目には広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典に参列し、広島市長からの平和宣言や広島市の小学生の平和への誓いを聞き、身近にある平和をつないでいくためには被爆者の思いを自分事として受け止め、自分から伝えていくことが大切だと知ることができました。その後、広島平和記念資料館を見学し、被爆者の方々のボロボロの衣服、大やけどを負った実際の写真や絵、被爆した建物の一部など悲

惨な姿になったものばかりで、見るだけで胸が苦しく、目を背けたくなるものばかりでした。ですがこの見学を通して原爆、戦争は絶対にあつてはならないとより強く感じました。

今、普通に過ごしている私たちの日常生活はあたりまえではないと実感し、改めて平和とはとても尊いものだと学ぶことができました。この貴重な体験を決して無駄にせず平和な世界を広げていくために自分から発信していきたいと思えます。

平和とは：

川西中学校教諭 神林 拓馬

熱線により焼け焦げた衣服、焼けただれ炭化した身体、命を落とされた人々の姿……。平和記念資料館で目にしたものは、全てが衝撃的だった。七十八年前の八月六日、確かに広島に原爆が投下され、多くの悲劇を生んだことを改めて実感した。

第二次世界大戦の最中に起きた広島・長崎への原爆投下。投下の理由として「戦争の被害を広めないために仕方なく行った。」と米軍が語っている記事が、資料館に展示されていた。その「仕方ない」のせいで今もなお苦しみ続けている人々がいることを思うと、遣る瀬無い気持ちが止まらなくなった。

世界には今もなお一万を超える核兵器が存在しているという。いずれまた人々は「仕方ない」を免罪符にし、広島・長崎の悲劇を繰り返すのだろうか。むつみ園様を訪問した際、職員の方が次のように仰っていた。

「被爆された方々の記憶が少しずつ曖昧になり、直接お話を伺える機会も減ってきました。」

当時の悲劇を語り継ぐ方々が減る今、次に語り部となるべきは現代を生きる我々だ。まずは今回の派遣で学んだことを一人でも多くの生徒に伝えることが、教師としての私の責務であると実感している。

広島で原爆を学んで

松代中学校三年 関 谷 海 咲

八月五日から七日の間、私は令和五年度広島市派遣団として、広島市に行きました。教科書やビデオでしか見たことのない原爆を現地へ行き、学べたことはとても貴重な体験となりました。中でも、特に印象に残っているのは平和記念資料館です。教科書には載っていない資料がたくさんあり、どの写真もまるでそこから被爆した方の叫びが聞こえてきそうなくらい衝撃を受けました。

また、原爆ドームも見えました。このドームも写真でしか見たことがなく、

実際に見るのは初めてでした。原爆ドームも現地で見ると写真よりも原爆の被害がどれだけのものなのか実感することができました。

あの日、たった一つの原子爆弾によってたくさんの人の命、家族、未来を失ってしまった事実を忘れません。このことを忘れないために、今回の派遣で学んだことを周りの人に伝えたいと思いました。もう二度と戦争を起こさないと平和な世界になることを心から願っています。

原爆の破壊力と残酷さ

松代中学校三年 高橋 洸太

僕がこの広島派遣の学びで印象に残ったことは、原爆の破壊力とその後の影響についてです。

その中でも特に印象に残ったのは爆発したときの爆風の威力です。原爆の威力の半分を占める爆風は、秒速二八〇メートルに達し、その爆風で半径二キロメートル以内の木造建築はほぼ倒壊し、さらに鉄でできた窓枠も曲がってしまったそうです。

また、原爆の威力の十五パーセントの放射線は爆発したときの熱で生まれた上昇気流で上へと上がり、黒い雨となって街へ降り注ぎました。

爆発が終わっても影響はたくさんあり、その一つが原爆症と呼ばれるものです。それは爆発したときに発生する放射線による障害で、人体に様々な影響を与えました。

そしてもっと怖いのは原爆症になった人は「うつるから来るな」などと差別をされたことです。原爆症は被爆者の心にも傷をつけます。

これらの被害の事実を僕は自分のできる範囲で伝えます。そして、この世から核兵器がなくなることを願っています。



平和公園へ千羽鶴奉納



赤十字病院メモリアルパーク内にて

戦争の恐ろしさ

松代中学校三年 若井悠香

戦争は、想像を絶する悲惨な出来事。私は、被爆者と同じ経験をすることはできませんが、現地広島へ行き、当時の状況をより身近に感じる貴重な体験ができました。

原爆ドーム、赤十字病院の一部が骨組みだけ残っているのが衝撃的でした。八月六日、一面が朱色に染まり、投下前の風景は跡形もなく消え、同じ街とは思えない光景。ほとんどが爆風による被害だと知り、人影の残る石などからも一発の原子爆弾の威力が凄まじく、とても恐ろしいと感じました。

原爆資料館には、被爆者の「魂の叫び」や遺品がありました。状況もわからないまま、人々が横たわっていき、生き延びていても、心と体に深い傷を与え続けていく。私は特に「孤独」という言葉が印象的です。明日が来るかも分からない。独り。これが当時の「現実」であったことを実感させられ、胸が締め付けられました。

「みんなの笑顔のために自分の力を使う」とこの誓いの言葉が私の心に深く刺さっています。「過去」として終わらせるのではなく、私たちが次世代へつなげていきたいです。今、生きていること、感謝の気持ちを忘れず、誰一人孤独にさせない、笑顔で平和な未来を築けるよう生きたいです。

広島市派遣で学んだこと

松代中学校三年 渡邊正空

ぼくは「令和五年度広島市派遣団」として広島に行かせていただき、原爆や戦争、平和について学んできました。

広島への原爆投下については、本や教科書で知っていましたが、詳しいことについては知りませんでした。広島に行き、実際に現地で学んでみると、とても衝撃的でした。特に印象に残っているのは、広島平和記念資料館に展示されていた原爆投下時やその後を描いた絵や写真です。

地獄絵図のような町、大火傷を負った人、炭化した人、水を求めて歩く人々、衝撃的すぎて言葉が出ませんでした。他にも様々な展示品を見て、改めて原爆の恐ろしさを知ることができました。また、平和記念式典に参列し、平和宣言や平和への誓いを聞き、戦争は良くないものだということや、平和の尊さを学ぶことができました。

今回の派遣で学んだことを自分だけのものにせず、学校や家族、地域の人々に伝え、戦争や原爆の恐ろしさや平和の尊さを知ってもらいたいです。世界中が核兵器の無い平和な世界になるように、まずは自分の身のまわりのできることからやっていきたいです。

広島派遣を通して

松代中学校教諭 青木一樹

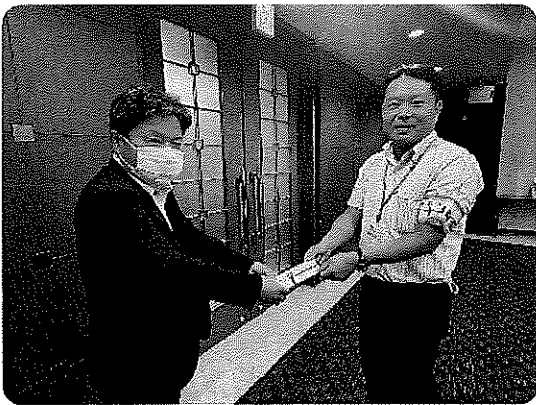
今回の広島派遣で私は初めて広島へ行きました。子供のころから原爆が落とされた場所ということは知っていましたが、実際にその場に行き、学ぶということはありませんでした。今回の派遣で、改めて原爆の恐ろしさ、今ある平和のありがたさを感じることができました。

原爆は爆発直後に中心部の温度は摂氏百万度を超え、そのときに起こる爆風は周辺の建物を倒壊させ、鉄ですら曲げてしまうほどの威力だったそうです。また、

原爆による後遺症や差別に悩まされた人も多くいます。原爆は投下されたあとにも人々を苦しめる恐ろしいものだと思改めて認識することができました。

しかし、普段の生活の中で、関わり方と思わなければ、そんな現実があったということとは感じられません。今日に至るまでには、多くの人々の困難と苦勞があったと思います。私たちが今、生きている世の中はその人たちの努力の上に成り立っているということに感謝して生きていくことが重要だと感じました。また、今回の広島派遣で学んだことを教員として、多くの生徒に伝えていくことで、今ある平和を大事にしていきたいです。

今回は、このような貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。



広島市へ義援金お届け

●令和5年度広島市派遣団

十日町市議会 星名大輔

天理教十日町支部 久保田 旭彦

平和を考える女性の会 小杉 セツ子

南中学校教諭 相田 杏介

生徒代表 加藤 旺汰

小堺 美旺

小林 杏愛

徳 永聖晴

樋口 琉正

村山 葵音

川西中学校教諭

生徒代表 神林 拓馬

小野塚 颯介

小林 優来

高橋 心愛実

丸山 瑛太

渡貫 芽依

松代中学校教諭
生徒代表

青木 一樹

関谷 海咲

高橋 洸太

若井 悠香

渡邊 正空

庭野 亮太

事務局

TOPICS



広島市から感謝状を授与されました

原水爆禁止十日町市協議会では、毎年8月6日に広島市で開催される平和祈念式典へ、市内中学生を中心とした派遣団を派遣するとともに、市民からいただいた義援金等を広島市などへお届けしています。

昭和40年からの長きにわたり続けてきたこの活動に対し、この度、広島市より感謝状が授与されました。

今後も平和運動・平和学習の推進に努め、核兵器のない世界の実現に向けて強く訴え続けてまいります。



TOPICS



原水爆禁止 十日町市協議会 創立65周年事業を開催しました



原水爆禁止十日町市協議会の創立65周年事業として、戦場カメラマンの渡部陽一さんによる平和講演会を越後妻有文化ホール「段十ろう」で開催しました。渡部さんは悲惨な戦地での経験や撮影した写真などをスクリーンに映しながら、「世界中のどの戦争でも犠牲者はいつも子どもたち。このような子どもたちの哀しみの声を、これからも写真を通じて多くの人に届けていきたい」などと語り、参加者は平和や命の大切さについて、改めて考えさせられる機会となりました。